幕末維新期の民衆における世界観と自他認識の変容

――菅野八郎における「異国」「異人」認識――

青野　誠

はじめに

幕末期には異国船の接近により、民間社会においても異国への関心は強まった。それは実際に異国船・異人を目にすることが可能であった沿岸地域に留まらず、民間の情報ネットワークを経由して内陸部においても見られるものであった[1]。そうした状況下で、断片的に伝えられた異国船や異人の姿は、民衆にとって畏怖の対象となり、ナショナリズム形成をもたらした一方で、未知なる存在として知的好奇心の向けられる対象ともなった。

では民衆は、具体的にいかなる世界観を有していたのであろうか。近世民衆の世界観に関する従来の研究では、民間に普及した出版物や芸能娯楽などを分析対象として、そこに描かれた世界観を考察する方法が用いられてきた[2]。だがその一方で、民衆がそれらの知識・情報をいかに受容し、世界観を再構築したかについては、史料的制約もあり、十分な検討がなされてきたとは言い難い[3]。

本稿で対象とする菅野八郎（一八一三〈文化一〇〉～一八八八〈明治二一〉）は、ペリー来航による危機意識から、東照宮信仰に基づく老中へ海防策を献策するため駕籠訴を実行した。その後の水戸藩への接近とも相まって、彼の世界観は攘夷思想の文脈で語られることが多かった。しかし彼の世界観と自他認識は変遷していくのであり、一面的に論じら

れるものではない。そしてそれは他の民衆においても同様のことが言えるだろう。

菅野八郎は奥州伊達郡金原田村（現在の福島県伊達市）の南朝武将を由緒に持つ菅野家の長男として出生した。彼は青年期から村内で度々訴訟に関連し、中農身分ながら金原田村の村役人を務めるなど在地社会において「農民的強か者」として頭角を現していった。ペリー来航の翌年、霊夢にて東照大神君の神託を受け、海防献策のため江戸にて駕籠訴を実施すると、さらにこの活動の延長線で士分化運動を展開するなど水戸藩へ接近し、水戸藩士であった義弟・太宰清右衛門へ海防献策の意見書『秘書後之鑑』を送付するなど積極的な政治運動を展開した。ところが、この書が御政道批判だとされ、一八五八（安政五）年、安政の大獄に連座し八丈島に遠流処分となった。八丈島では農業をしつつ、島民相手に寺子屋を経営し賃金を得て生活していたようである。そのような折に、同地に流されていた烏伝神道の祖・梅辻規清と交流し、その教えを一部受容する。一八六四（元治元）年、特赦によって故郷に戻るも、在地社会の治安は極度に悪化しており、そのような状況に対して、誠心講と呼ばれる組織を結成して自衛に努めた。だが一八六六（慶応二）年に、幕末を代表する世直し一揆である信達騒動が発生すると、誠心講の参加者が一揆に関与したことなどを理由に、一揆の頭取だと嫌疑を受け捕縛された。当時の江戸で発布された瓦版には「金原田村世直し八郎大明神」の記述が見られ、同時代の人々からも「世直し」の文脈で理解されていたことが窺える。一八六八（慶応四）年、戊辰戦争が勃発すると、自らは牢中にありながら、関東方面へ甥を派遣するなど情報を収集した。その帰結として、会津藩や仙台藩を批判し、官軍へと期待を寄せ、自らの釈放や仁政の実施などの歎願を行う。同年には官軍によって赦免される。その後、明治期に入ると政治活動は鳴りを潜め、八丈島にて交流があった宗匠・石潤亭蘭風に再び俳諧を師事するなど風雅の道に生き、一八八八（明治二一）年、一月二日に没した。

八郎に関する研究のなかでも特にその世界観に言及したものとしては、庄司吉之助[4]や大橋幸泰[5]の研究を挙げることができる。しかしこれらの研究は、ある一時期の八郎の世界観・自他認識を提示した性格のものであり、その変遷過程を追ったものではない。

そうしたなかで檜皮瑞樹の研究[6]は一八五四（嘉永七）年から一八六八（慶応四）年に至るまでの思想を分析した最も網羅的な研究である。だが、檜皮は「八郎の対外認識とは観念として把握される脅威であり、そうであるがゆえに八郎が入手した情報、特に西洋や夷狄といった対外事情に

ついて、その情報源や入手経路といった点を論じることはあまり意味を持たない。それ以上に、八郎がなぜそのような情報を書き留めたのか、何を脅威として位置づけその克服方法を見出したのかという点こそが重要であり、本論ではこの点を中心に分析を行う[7]」と述べている。しかし「なぜそのような情報を書き留めたのか」という前提には、「なぜその情報を取捨選択したのか」という問題が存在するはずであり、情報源と八郎の著作に見られる相違から、彼の思想をより詳細に窺うことは可能であると考える。

以上のような問題関心から、本稿では檜皮論を踏まえつつ、八郎の著作の中に見える「異国」「異人」の記述や模写された地図を元にして、その世界観の変遷を当時の出版物と照らし合わせながら考察する。それにより、幕末維新期の民衆における世界観の一端を明らかにすることを目的とする。

なお本稿で用いる菅野八郎関係史料については、すでに翻刻がなされているものもあるが、誤読や翻刻者間の表記の揺れが存在するため、すべて原本による確認を行い、句読点を補った上で出典を註釈に示した。

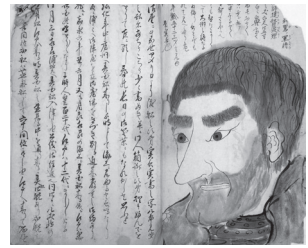
一、嘉永・安政期における天譴災異としての「異国」

八郎による「異国」認識のはじまりは、ペリー来航に対する危機意識であった。そしてこの危機意識こそ、在地社会に生きる百姓であった彼を政治活動へといざなったのである。彼は一八五四（嘉永七）年に江戸にて老中へ駕籠訴を実施するが、そのきっかけとして、同年正月に東照大神君の神使が海防献策を命じる霊夢を見たことを挙げている。つまり彼は「御国恩」に報いるために、「異国」接近という国難に対応すべく政治運動を展開したのであった[8]。

では彼は「異国」や「異人」をどのように認識していたのであろうか。以下にあげる史料は江戸での駕籠訴後、一八五四（嘉永七）年の五月に書かれたものであり、江戸の情勢や自らの駕籠訴の顛末を故郷に伝える性格のものである。

□□利駕ノ軍将（カグシヤウ）水師提督（テイトク）波理（ペルリ）、身之丈六尺四五寸、色白く鼻高くまゆ毛ふとく、目ハ少シ丸ク眼中するどく、音声さわやか也。如何ニも智たくましく見へて、大州之将たる人相備り、言わずもそれと見へたり鳧。年齢五十二三才と見ゆ。是実相也。（中略）

一　此度渡来之異船ハ、北アメリカの内ワシユントンの船也。但し蒸気三艘、軍船五艘なり。尤、亜美理駕（アメリカ）



図①　『あめの夜の夢咄し』

へ日本相州浦賀より、里数近キハ七八千里、遠壱万里位アリト言。然ルニ八日位ニして浦賀へ着船ス。其早き事矢のごとく、壱昼夜ニ三百八十里位はしる也。[9]

（『あめの夜の夢咄し』）

この史料内に描かれている【図①】のペリーの肖像画は当時の瓦版などに見られるペリー像の模写であると考えられる。当時の瓦版にはペリーの肖像画とともに、アメリカの地理情報や、献上品として持ち込んだ蒸気機関車の模型、来航した艦隊の情報などが添えられているものが多数見受けられる。それらの情報はしばしば不正確なものであったが、特にその技術力に関する驚きと関心を反映しているものだといえる。

八郎の記述もそうした江戸における人びとの反応を反映しているものだと考えられる。無論、八郎は実際にペリーを目にしたわけではない。ただ彼は実際に、江戸での駕籠訴を実行する数日前の二月一一日に神奈川へ赴き、「渡来之異船」を目にしたとの記述が残されていることから、実体験に基づいて「異国」への関心と衝撃を抱いたことは想起できる。

ただ、「如何にも智たくましく見へて、大州之将たる人相備り」という評からは、一見好意的なニュアンスを読み取ることができる。だが、続けて以下のように言うのである。

一　此度渡来の異人を唐人と言もの多し。是大イなるあやまり也。唐人とハ、唐土四百余州の人をさして言也。唐土は日本の師国ニして、敬ふべき国也。然ルに、逆賊のアメリカ人をさして唐人とハ、何事なるぞや、あまり愚之至り也。依、世界之有様左ニ略図す。（中略）右之通り、〇アジア〇ヨウロッパ〇リミア〇北アメリカ〇南アメリカ〇メカラニカ、是ヲ世界六大州と申也。如此八方ニ大国数多ありとゐへ共、児女ハ、日本・唐・天竺より外ニ国ハなきもの丶よふに相心得候ものも有之故、大略を爰ニ顕したり。猶委しくハ、万国輿地全図をもとめて、見給ふべし。此図ハヲランダより出たる図なるが故に、少しも疑ふ所なし。蘭人ハ万国へ行ざる所なく、世界之内、我家も同様ニ自由自在ニ走歩行、交易専らにする国なれば、氷海夜国に至る迄、蘭人の行ざる所なしと言。依而地のまわり九万里有と書たり。是疑ふべからず。疑心ハ其身の愚なり。

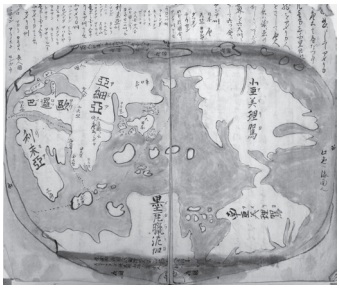
（『あめの夜の夢咄し』）

ここで彼は「此度渡来の異人」を「唐人」と呼ぶものの多いことを批判するのである。ここから彼は「師国ニして

敬ふべき国」である「唐土」と「逆賊」としての「アメリカ」を対比的な存在として認識していることがわかる。

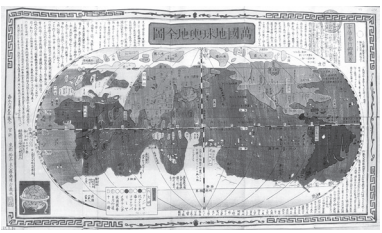
右の史料中に描かれているのが【図②】に示した「世界之有様」である。ここには南半球にメガラニカ大陸が描かれており、文中に「万国輿地全図」という名称が見られることからも、この模写の原本は長久保赤水の『地球万国山海輿地全図』の系統であることがわかる。[10]【図③】に挙げたものと比較すると、八郎はほぼ忠実に同図を模写したといえるであろう。

ここからも八郎が「日本・唐・天竺」のほかにも国々が存在するという知識を有しつつも、そうした国々を中心とした世界観を有していたということがわかる。さらに【図②】には原図同様に「小人国」「女人国」「夜国」といった実在しない国々の名前も見ることができる。すでに一八世紀の後半には、こうした地図は旧来のものであるとみなされていたが、それ以降も民間社会においてはなお根強く影響を及ぼしていた。[11]八郎にとっては従来の世界観こそが自らの生きる世界を構成する秩序であると認識され、ペリー来航とはそうした世界観を揺るがすものだと認識されたのである。



図②　『あめの夜の夢咄し』

だがその一方で、そうした「逆賊」が有する技術力への信頼という点も指摘せねばならない。「万国輿地全図」が、「世界之内、我家も同様ニ自由自在ニ走歩行」する「ヲランダより出たる図」であるために「少しも疑ふ所なし」と述べられている。厳密には同地図の元になったのはマテオ・リッチの『坤輿万国全図』であり、彼はイタリア人であるが、渡来のものはすなわちオランダのものであると八郎が誤認していたものと推測される。無論、江戸時代を通じて国交のあったオランダとアメリカを同列に判断することはできないが、少なくとも八郎が「異国」の技術力に関心を示し、高く評価していたのは、先の異国船の事例にも明らかである。つまりこの時期の八郎にとって、日本に進出してきた「異国」とは、性質は相容れない「逆賊」であるが、その技術力に関しては関心を抱く対象であったのだということができよう。



図③　『万国地球輿地全図』

では、そうした存在である「異国」が日本に接近してきた理由を、

彼はどのように考えていたのであろうか。次に挙げたのは、八郎が徳川斉昭への献策を目論み、一八五五（安政二）年の一月に水戸藩士となっていた義弟・太宰清右衛門に送った『秘書後之鑑』を後年に書き写したものである。[12]

秘書後ノ鑑大略

当時天下之諸役人皆盲目同様にして御政事向は理非にかゝわらず金銀の音を便（ママ）りに手さぐりにやらかす故、罪なきものを罪に落し、又大罪ありとゐへども小金の音にハ其罪を免（ユル）す故に、政道売買之世と成果、賢臣隠れて佞臣進ム。日本ひろしとゐへ共此佞セいする者なく、次第に募りて終にハ乱の□□□□ならん。天是を悪（ニク）ミ給ふ歟。アメリカの強兵に命□□□□其罪をセめ給ふに、水戸殿ふしぎの謀斗を以てしばし太平に治メ、万民とたんの苦しミをすくい給ふ事、実難有御殿也。[13]

（『判断夢ノ真暗 巻之上 三冊之内』）

ここでは「理非にかゝわらず金銀の音を便りに」、「罪なきものを罪に落し」、「大罪ありとゐへども小金の音にハ其罪を免す」といった幕政の腐敗が批判されている。そしてそのような現状に怒った「天」が、「アメリカの強兵」に命じて日本を攻めさせたのだと認識されているのである。無論、これを八郎が実際に信じていたかという点については留保が必要であるが、当時、安政の大地震が世直しの天譴であるという認識が民衆のあいだに広まっていた[14]ことから考えれば、八郎がこうした天譴災異思想を有していたとしても不思議ではない。彼にとって「異国」の接近は秩序の破壊として認識されたが、そうした事態を招いたのは内政の悪化によるものであると考えられたのであった。

そして、「水戸殿」すなわち徳川斉昭が、そうした「異国」に対抗する「実難有御殿」であるとされるが、それは「太平に治メ、万民とたんの苦しミをすくい給ふ」ためである。そこには幕府が主体となって[15]太平維持と人民保護という仁政を実行しうる期待と信頼が存在しているのであり、結果的に「異国」の脅威から逃れることができるという一種のオプティミズムを見出すことができる。

この時期の彼の思想について小結すれば、日本や中国を中心とした旧来の世界観を有しており、「異国」の有する技術力に関心を寄せながら、それへの対処としては、為政者である幕府の仁政を期待するという、民衆の伝統的な思想様式のなかにあったことがわかる。彼は瓦版や地図といった、民間に流布していた媒体から世界観を形成していったのであり、その意味で当時の民衆に共有されていた世界観を如実に表しているともいえるだろう。

二、文久期における夷狄としての「異国」

だが実際に「異国」の脅威は去ることは無く、アメリカのみならず列強諸国の相次ぐ日本への進出は、否応なく八郎の世界観を変容させることとなった。八郎は前掲した『秘書後之鑑』が御政道批判とみなされ、[16] 安政の大獄に連座し、一八六〇（安政七）年より八丈島へと遠流され、以降、一八六四（文久四）年に恩赦されるまで同地での生活を余儀なくされた。こうした情報が限定された環境にありながら、この時期に彼は多くの「異国」に対する記述を残している。

以下の史料は一八六二（文久二）年に故郷へと送られた書簡の一部である。当時の彼は八丈島から帰郷できる目途もなかったのであり、遠く離れた家族と子孫に向けての教訓書という性格を有したものである。

切支丹の法は、海を山に見セ、火を水と見セ、六月雪を降セ、海山を船橋なく、足もぬらさず歩行ス、石を金に見セる、皆魔法也抔、口から出法第を言て、諸人の心を惑ス者有リ。魔法と言ても別にふしぎなる物ニハあらず。先ツよきあんばいに人をたぶらかして、金銀を貪り、又は〇スリ〇盗人〇、此等魔法の第一。又人をたぶらかして、金銀財宝をかりて不返、又悪をたくミて人を殺スに我手を用ひず、人手を用いて害をなし、己が恨ミを晴らし抔するが、切支丹魔法の奥意と見へたり。然れば、〇わか〇あがた〇のりき〇はやりがミ抔も切支丹に異なる事なし。皆人をたぶらかすの法也。（中略）偖又、切支丹に類する者数多有と雖、是には一切御構なく、切支丹宗門斗リ厳敷御成敗に相成候訳ハ如何ニと言に、此切支丹之義ハ、南蛮国王の謀計にて、刀に血ぬらずして日本を奪取んと企、〇バテレン〇イルマン〇等を渡海為致候事、明白に顕れし故也。（中略）たとへ百姓たり共、大勢心を一ツにして、命をだニ不惜ば、少しも武士に異る事なしと見へたり。危ひ哉。日本、半国の愚民共切支丹になるならば、忽チ天草の如く、東西南北に乱を起させんとのバテレンの工夫ありしならん。[17]（「子孫心得之事」）

ここで親族に向けて説かれるのはキリスト教に対する警戒である。それによれば「切支丹の法」は言葉巧みに「諸人の心を惑ス」ものであり、「はやりがミ」のような俗説と同一のものであるとされる。そうしたなかでも、「切支丹宗門斗り厳敷御成敗に相成」のはなぜなのであろうか。八郎はそれを、「南蛮」が「日本を奪取ん」とするための手段であるという。そして、そうした民間へのキリスト教

の流入を止めることができなければ、「天草の如く」民衆が命を惜しまずに反乱するようになってしまい、それに乗じて「異国」に征服されてしまうと危険視するのである。

ここでは「異国」の接近が天譴であるというような以前までの認識は全く見られず、自らの利益のためにキリスト教による民心掌握によって日本を征服しようとする、侵略者としての「異国」像を読み取ることができる。

こうした「異国」の認識の変容は、同時にそれに対置されるべき為政者への要求の変容をももたらすのである。

英国魯西亜の両帝宣言には、オロシヤは世界の海を不残、イギリスは世界の陸地不残領せんと示し合せ、夫よりイギリスの威名万国へ響き渡り、万国の将士恐懼する事、小雀の鷹に出逢ふ如く、其風聞、万国一統なれば、水戸より出たる隠密の者、右の段々具に水戸卿に内達に及びしかば、前後ぬからぬ斉昭卿、異国防御の手配り大炮を鋳立、海辺へ新城を築きしは、今よりとく異人等せまり来る事を御遠察あればなり。然るに愚盲侫奸の族（やから）、其御明智を不知己が小智に叶はぬを誹り、太平の世に不似合は謀叛の気瑞顕れたり抔、口から出次第の悪説を流すもの多くして治に居ては悉く乱を忘れて酒色にふけり、志あるものを嘲り誹る。然るに嘉永六癸丑年、始めて異船渡来の刻に至ては右等の愚者は俄に動転して、防戦の方便（てだて）を失ひ唯々周章（あはて）ふためく斗りなり。[18]（『八丈嶋物語 五巻ノ内 一』）

これは一八六三（文久三）年に記述されたものであり、薩英戦争に関する記述を中心に海外情勢についてまとめたものである。この箇所では「異国」「異人」と「斉昭卿」が対比的に描かれている。この点は安政期と変わらないように見えるが、ここでは斉昭に期待されるのが「異国防御」であり、「大炮」の鋳造や海岸に「新城」を築いたことなどが明記されていることがわかる。つまりこの段階において八郎にとっての「異国」は、「謀斗」によって防ぐのではなく、武力によって討伐せねばならない対象になっているのである。

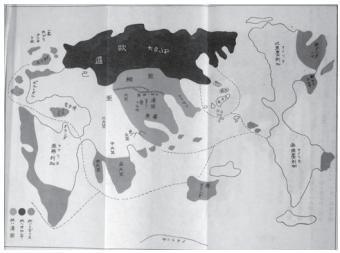
そうして「異国」の脅威を認識した八郎は、一括りに捉えていた「異国」をより細分化して認識するようになる。

海外新話に云。英国当今所属の国々島々世界中星羅延漫せり。海防に心有の士蔑視する事無して可なりと云々。是を以ても勘考可有事なり。猶委曲は地球全図を求め見給ふべし。英国如斯の勢にて万国敵するものなく恣に威を振ふ。然るに　皇国の神威いまだ尽ざる所の島津和泉と云もの顕れ出英国の邪威を取ひしがんとす。先づ暫時後、趣をこゝに引上げて島津の抜群なる事云。旨趣前後を弁へ給ひ　此和泉と云人（薩州家の家老職か当薩摩公の実父と云）英傑日本無双にして当時京都にありて　禁

裏を守護し奉り、威勢肩をならぶる者なし。（『八丈嶋物語 五巻ノ内一』）

ここでは「英国」の国際的な位置づけが示されるとともに、それに対する「島津和泉」、すなわち島津久光が「皇国の神威」を代表する「英傑日本無双」の人物と認識されている。八郎にとって薩英戦争とは薩摩藩による個別的な戦争ではなく、「皇国」を代表した戦闘であるとみなされたのである。

また、この史料にも【図④】に掲げた世界地図の写しが記載されている。これは嶺田楓江が著した『海外新話』[19]掲載の「坤輿略図」（【図⑤】）が元になっていると考えられる。だが一見して、両者には大きな違いが存在していることに気づかされる。『海外新話』では「英夷所領各地施赤色以表之」と、イギリス領のみが色分けされているのに対し、『八丈嶋物語 五巻ノ内一』掲載の写しでは清・ロシアの勢力圏にまで言及がなされている。また、『海外新話』ではロシアがアジアに分類されているが、写しではヨーロッパに分類されている。こうした差異からは、八郎がかつてのように目にした情報をそのまま模写するのみならず、複数の情報を精査し、世界観を再構築していたことがわかる。



図④ 『八丈嶋物語 五巻ノ内一』

それは、記載されている国名にも表れている。『海外新話』において明記されている「イスパニア」「アラヒヤ」「満州」などは写しにおいては省略されている。その一方で、『海外新話』には国名のみが記される「清国」が写しでは「ムカシノ唐ヲ云也」との記述が加えられ、「印度」が写しでは「中天竺」「南天竺」など複数の「天竺」として記載されているのである。また写しの下部には、小さいながらも「メカラニヤ」を見つけることができる。

こうした情報の取捨選択からは、八郎が海外に関する情報収集に励み、知識を増やしつつも、意図的に従来の「万国輿地全図」的な世界観を維持していたことがわかる。そして「英国」「ヲロシヤ」に対する「皇国」という表現がこの時期に表れていることからも、ナショナリズム的思想が一層深化しているということができるだろう。

図⑤ 『海外新話』

三、慶応・明治初期における夷狄としての「異国」

夷狄としての「異国」観は、戊辰戦争という内乱を経てどのように変容していくのであろうか。八郎は一八六四（文久四）年に郷里へと戻るが、一八五六（慶応二）年に発生した信達騒動に際して、頭取の嫌疑を受け捕縛され入牢することになる。そのような状況下で彼は、甥を関東各地に派遣して社会状況を視察させている。それをまとめ自身の知見を加え、一八六八（明治元）年（史料では慶応四年と記載）に執筆したのが次の史料である。以上のような性格から八郎の思想のみを表したものではないが、どういった情報を採録するかにあたっては、当然、彼の意思がはたらいているのであるから、彼の「異国」認識を反映したものといって差支えないであろう。

相州小田原迄参り、色々見聞仕候ニ、皆一円官軍にて、上州高崎辺の噂とハ、天地雲泥の相違にて、異国軍勢抔ハ壱人も来らず、箱根ハ官軍方八千程の勢にて御固めあり、万民の患少きよふ、諸事御慈悲の御取扱なり迚、諸人官軍を尊敬し奉る事大方ならず。[20]（「八老独年代記 巻之中」）

これは小田原における社会状況を記した場面である。ここでは「異国軍勢」がこの地に及んでいないことが、「官軍」の「御固め」によるものと認識されており、そうした状況から「諸人官軍を尊敬し奉る」状態であるということが指摘される。ここからは「異国」を流入させないことが「御慈悲」と認識されていることが読み取れよう。やはり八郎が期待していた仁政とは「異国」から民衆の生活を守ることであり、それを実行できる為政者は、この時点では官軍へと推移しているのである。

しかし、そうした期待があるからこそ、「官軍」の「異国」への接近は許さざるものとして彼の目に写ったのである。

薩長土の三公も如何なる事ぞ、始ハ異人を忌ミ嫌ひ、多く討取し噂もありしが、今となりてハ一向構ハず、ます〳〵異人を大切ニして、交易大に繁昌せさせ、其上新聞の面を見れば、比叡山の僧徒等還俗可致旨、又はゑぞ地開発の義抔、一がいに被　仰出候義、乍恐御思慮浅ニ似り。いまだ国々平定せず、諸侯の心底思ひ〳〵にして、足元より敵の起るも知り難キ折節なるに、万民九分九厘迄信る仏法へ障りを附なば、諸民の心を失ひ、如何なる逆徒の出来らんも難計。若さよふ事の出来なば、其虚ニ乗じて事を起さんと計族も多からん。（「八老独年代記 巻之中」）

ここでは「薩長土の三公」が従来の攘夷方針を転換し、

「異人を大切ニして」いることに対して批判がなされている。さらに批判は神仏分離令、蝦夷地開発にまで及んでおり、そうした政策によって「諸民の心を失」うと指摘している。前掲のキリスト教に対する所感にも見られた点であるが、「諸民の心を失」うこと、すなわち仁政の崩壊による民心の離反に対する危機感は、彼の内政に対する一貫した態度だといえるのではないだろうか。それはかつてはキリスト教の流入という、外部から新しい秩序がもたらされることへの危機感であったが、ここに至っては仏教の破壊という、内部の伝統的秩序が崩れることへの危機感として表れているのであった。

扨又、皇国の将士達に一言申度事あり。今日本如此乱し其根本と申ハ、異船渡来が始りなり。然レば、異人ハ可憎の第一なるに、諸侯何レも其異人を大切にして、反而日本同士軍を専一ニし給ふ事、暗愚蒙昧とも言ツべし。若今三国志のネイコウ先生此地ニ再来して、諸侯面会あらば、皆屎虫なりと誹謗せられん。早〳〵（ママ）各々改心して、同士軍を止メテ、ネイコウが誹りを脱れ、万民の苦しみも救ひ玉ひかし。前にも言如く、一天の下の一世界なれば、六大州一　天子に治る時節至来ならば、異人を恐るゝは是非なき事なれども、同士軍をするハ、愚弱の上の愚弱にして、慚愧遣る方なかるべし。能々観考し給へね。（「八老独年代記 巻之中」）

ここに至っては「日本如此乱し其根本」は「異船渡来」であると断言される。「異人ハ可憎の第一なる」存在なのに、「異人を大切にして」内乱をするのは「暗愚蒙昧」だと言うのである。この時点で、かつての天譴災異としての「異国」という思想が霧散していることは明らかである。内政悪化→夷狄襲来というロジックが、夷狄襲来→内政悪化と逆転しているのである。こうした変容は、「異国」の脅威を具体的に認識していく過程で、その接近への危機感を一層強めていった上でのものだったのであろう。そうした思想変容をした彼にとっては、「異人を恐るゝは是非なき事」であるが、それに対して国内が一丸になり対抗していかなければならないのであり、「日本同士」が内乱をすることこそ「愚弱」だと認識されたのである。

四、明治十年代における日本の「開化」と自他認識

かつて「異国」に対抗することこそが仁政であると認識していた八郎にとって、明治維新によってもたらされた社会は、その期待に逆行するものであった。欧化政策に代表される「外国」の積極的導入に対して、明治期の八郎はいかなる反応を示したのであろうか。

彼は一八八八（明治二一）年まで存命であったが、明治期に残された記述はごくわずかである。左に挙げたのはそうした史料の一つであり、一八八一（明治一五）年に執筆されたものである。ここでは寓話化させた政治批判が展開されており、熊（＝八郎）と狸（＝政府役人）が「開化」とはいかにあるべきかということを論じている場面である。

（熊が言うところには―青野註）信ヲ本トシテ下ニハ専ラ仁慈ヲホドコシ、上ニハ専ラ忠義ヲツクシ、万民腹鼓ヲ打ツテ楽ムヨウ粉骨細身（ママ）スルカ真事ノ開化ト云ベシ。（中略）狸ノ大金セヽラ笑シテ云。ソレソンナ事ヲ云ガ則旧弊也。昔ハムカシ今ハ今、下ヲ絞ツテ上ノ益筋ヲ考ヒ独立セヨトノ御規則也。此独立スルニハ我ハ我タケ貴様ハキサマダケ、思ヒ〳〵益筋ヲ考ヒ、他ノ者ハ喧嘩ヲシテ死ウガ生ヨウガ一向カマワズ、又盗ヲシヨウガ火附ヲヲシヨウガ（ママ）カカリガアルカラ是ニモカマワズ、我身斗リ大切ニト実ニ難有キ世ノ中ニアラズヤ。（中略）熊莞示ト笑、汝ハ口斗リリツパニシテ心ハ我身ノ安楽ヲ願フノ外念ナシ。是ヲ号、悪人ト云。汝、元来畜生ナレバ極悪獣トモ云ベキカ。開化ト云、旧キ弊ヲ廃シテ新ニ、善事ヲ求テ是ヲ行ヒ、新ニ善キ姿ヲ見テハ是ヲ真似、新ニ善キ物ヲ得テ是ヲ用ヒ是等ノ物ヲ開化人ト云。汝等ハ左ニアラズ。善事モ善物モ旧キハ皆廃シテ、悪デモ邪デモ新ニ求ルヲ開化ト思ウハ大ナル間違ニテ汝等ハ開化ニハアラズ。開弊ト云者也。[21]

（「夢之浮言」）

ここで熊は、「信」に基づいて、目下の者には仁慈を施し、目上の者には忠義を尽くし、万民が太平を享受できるような社会形成のために各々が努めることこそが「開化」であると主張する。狸はそれを「旧弊」に過ぎないとして一蹴し、「我身斗リ大切ニ」考えることこそが「独立」であり「開化」であるというのである。だが、こうした狸の思想は、熊の目から見れば「開弊」にすぎないと痛烈に批判を加えられるのである。

熊が要求している社会は、いわゆる仁政イデオロギーの範疇にあるのであり、近世社会への回帰願望に他ならない。だが、続けて展開される政府批判は正鵠を射たものであるだろう。八郎はこの時点において、決して「開化」を否定しているのではなく、それをもたらした「外国」を批判しているのでもない。彼の批判の矛先は、「外国」からもたらされた「独立」などの啓蒙思想を表面的に模倣する明治政府や社会に向けられるのである。

そのことは次の文章からも読み取れる。

偖亦今日本ノ人気前紙ニモ云如ク、大ニ衰ヘタリ。其本源ヲ探クルニ徳川家二百余年ノ治ヲ保チ、土地ニ不

似合、人口多クナツテ万物不足シ渡世ノ為メニ其心賤シクナリ、色ケノ弊ヲ発シ、其悪気、天地ニ通シテ、今明治十五年ヨリ四十六年前、申年ノ大凶作ヨリ年々気候悪シク、猶々人気衰ヒ弊多クナレハ天地モ亦悩ミ多ナルユヘ、万物イヨ〳〵不足シ、終ニ今ノ如ク相タガヘン。欲ヲ張リ、虚言偽リヲ粧リテ我益ヲ付ント人情ヲ失ウ国ト成ツテ外国ヨリ笑ヒ誹ラル。然ルニ今、利学専ラニ教ユルユヘ、名々盗心トナツテ外国ヘタヘシ恥カシキノ第一ニアラズヤ。此利学ヲ用ユルハ、英米仏抔ノ盛国ニテ人気豊カニ実直・信ヲ本トシ、虚言偽リ抔知ラザル程ノ国ヘハ調度ナレトモ、欲情然(裂カ)シキ我国ニテ利学用バ、欲ニ欲ヲ重ル道理、終ニ盗心トナルヨリ外ナシ。故ニ道徳、既ニ絶ナントス。神・儒・仏ノ三道ニアラザレバ、我国ノ治世永ク保ツコト不能也。[22]（「真造辨 八郎信演」）

日本では現在「利学」がさかんに教えられているが、それは「盗心」となるばかりである。そのような「利学」は「英米仏」などでは有効であっても、日本にそのまま導入することはできないと言う。なぜならそれは、「英米仏」が「盛国」であり「虚言偽リ抔知ラザル」のに対し、日本は「虚言偽リヲ粧リテ我益ヲ付ント人情ヲ失ウ」、「欲情」の激しい国であるからだとされる。つまり、「利学」すなわち功利主義[23]は本来、社会全体に利益をもたらすものであるが、「人気」が衰えた現在の日本においては誤って理解され、利己主義にすぎないものとなっていることを批判するのである。

ここからは幕末期における「異国」評価がまったく逆転していることに気付くであろう。かつての八郎は「異国」の技術力に対して脅威と関心を有しながらも、敬うべき「師国」ではないと、その性質に関しては批判していた。それが、明治十年代には「盛国」と認識され、逆に日本こそが「人情ヲ失ウ国」であると批判されるのであった。ここに至って、八郎が敵視していた、仁政に基づく近世的秩序を破壊する存在は、かつての「異国」から明治政府へと変容したのである。

おわりに

これまで検討してきた菅野八郎の世界観の変容は、以下のように概括することができる。

嘉永〜安政期には天譴災異としてペリーをはじめとする「異国」が捉えられている。技術を評価する一方で、アメリカを「逆賊」と認識し、幕府がそれに対抗することが仁政と認識された。そして、この時期の「異国」認識は、民

間に流布した情報をほぼそのまま受容していたのであった。

文久〜明治初期には「異国」の脅威が具体的に認識されるに伴い、夷狄としての認識が強まっていく。内乱の原因を「異国」の接近によるものだとして、武力を用いて対抗するべきだと唱えられた。この時期は「異国」に対する危機意識を強め、海外情勢に関する出版物によって知識を集積しつつ、彼なりに情報を選択し世界観を再構築していたのである。

明治十年代には政府への失望と、その対置としての「外国」像を読み取ることが可能である。ここでは政府が表面的な文明化・啓蒙化に取り組むことにより、仁政が顧みられない状況への不満が述べられている。日本は「神・儒・仏」に基づいて治めるべきであり、「利学」を用いることができる「外国」よりも現在の日本は劣っていると認識されている。

このような変遷から考察したとき、八郎は当初、他者によって与えられる情報を受容するだけであったが、次第にそうした情報を選別し、自らの解釈によって世界観を再構築していったことがわかる。そして、八郎の最たる関心は近世的秩序に基づく「太平」な社会を為政者が維持していくことにあり、「異国」はそれを脅かす象徴として認識されたのである。だが明治期には、明治政府自身がそうした近世的秩序を否定したことによって、八郎にとっての脅威の対象は明治政府と認識されたのであった。

八郎は駕籠訴や安政の大獄という経験を有している点において、一般的な民衆の事例とは言い難いかもしれない。しかし彼が有していた世界に関する知識・情報は、多くを民間に流布していた出版物から得たものであり、決して特異な思想形成ではなかったと考えられる。その意味で彼の世界観の変容は、民衆が未知の情報を受容していく過程において、情報と知識を次第に精査していく一つの事例としてみなすことが可能であろう。

注

(1) 宮地正人『幕末維新期の文化と情報』(名著刊行会、一九九四年)。

(2) 日野龍夫「近世文学に現れた異国像」(朝尾直弘編『日本の近世』第一巻、中央公論社、一九九一年)、M・ウィリアム・スティール「庶民と開国—新たな対外世界像と自国像—」(『季刊日本思想史』第四四号、一九九四年)、岩下哲典「近世後期の海外情報とその環境—幕府による情報管理と知識人および庶民の「情報活動」をめぐって—」(岩下哲典・真栄平房昭編『近世日本の海外情報』岩田書院、一九九七年)、ポロヴニコヴァ・エレーナ「近世庶民

の「世界」像―節用集の世界図を中心に―」（『日本思想史研究』第四五号、二〇一三年）、同「近世庶民の自他認識―節用集の人物図を資料として―」（『文藝研究』第一七六集、二〇一三年）など参照。

（3）このような視点からの研究の一例として、宮地正人「風説留から見た幕末社会の特質―「公論」世界の端緒的成立―」（『幕末維新期の社会的政治史研究』、岩波書店、一九九九〈初出一九九三〉年）が挙げられる。

（4）庄司吉之助「菅野八郎」（庄司吉之助・林基・安丸良夫編『民衆運動の思想』日本思想大系五八、岩波書店、一九七〇年）。

（5）大橋幸泰『潜伏キリシタン―江戸時代の禁教政策と民衆―』（講談社、二〇一四年）一〇三～一二四頁。

（6）檜皮瑞樹「一九世紀民衆の対外観―夷狄意識と救世主像―」（須田努編『逸脱する百姓―菅野八郎からみる一九世紀の社会―』東京堂出版、二〇一〇年）。

（7）前掲檜皮論文、一〇〇頁。

（8）この時期の八郎の超越観念に基づいた政治活動と彼の思想については、拙稿「幕末期民衆における「家」・「個人」意識と超越観念―菅野八郎の士分化運動を事例として―」（『日本思想史研究』第四八号、二〇一六年）を参照。

（9）『あめの夜の夢咄し』（福島県歴史資料館蔵菅野隆雄家文書一）。

（10）『地球万国山海輿地全図』は江戸時代を通してしばしば改訂版が刊行されており、その内容にも微妙な差異が見受けられる。本稿では東京外国語大学所蔵（特－六五二）、嘉永六年刊行の安部泰行撰・鈴亭主人森桑補訂蔵版『万国地球輿地全図』を用いている。これは『民衆運動の思想』において庄司吉之助が『あめの夜の夢咄し』を校注した際に、【図②】は嘉永六年の写しであると指摘していることによるものであるが、同氏はこの版が元である根拠については述べていない。この点に関しては今後の検討が必要である。

（11）織田武雄・室賀信夫・海野一隆『日本古地図大成 世界図編 解説』（講談社、一九七五年）。荒野泰典「近世の対外観」（『岩波講座日本通史』第一三巻、岩波書店、一九九四年）。

（12）『判断夢ノ真暗 巻之上 三冊之内』は文久期の史料であるが、掲載したのが現存しない『秘書後之鑑』（一八五五〈安政二〉年）を略記している部分であるためここに引用した。この史料には執筆時期が記載されていないが、後述する「真造辨 八郎信演」には『秘書後之鑑』を太宰清右衛門に送ったのが「安政二年正月廿八日」だと明記されている。

（13）『判断夢ノ真暗 巻之上 三冊之内』（福島県歴史資料館蔵菅野隆雄家文書四）。

(14) 北原糸子『地震の社会史―安政大地震と民衆―』（吉川弘文館、二〇一三年）。

(15) 八郎は水戸藩に対してのみ仕官運動を行うが、その理由を「又御三家ノ内にも副将軍とあらセらるれば、詰りハ御公儀様も同様ニ存ます」（『判段夢ノ真暗 巻ノ上 三冊之内』福島県歴史資料館蔵菅野隆雄家文書四）ためと述べていることからも、公儀の代表者として斉昭を捉えているという意識を窺うことが可能である。

(16) もっとも八郎が捕縛された本来の理由としては、義弟の太宰清右衛門が天狗党に関与し逃亡中であったことから、その人質という意味合いが強かったと考えられる。

(17) 「子孫心得之事」（『八郎十ケ条』福島県歴史資料館蔵菅野隆雄家文書五）。

(18) 菅野八郎著・安田次郎編『八丈島物語 五巻ノ内一』（郷土文献刊行会、一九三四年）。八郎が執筆したものを後年に翻刻、編集したもの。本稿では福島県歴史資料館蔵（庄司家寄託文書一－二四八八）のものを用いた。

(19) 『海外新話』は一八五〇（嘉永三）年刊行。輸入図書の『夷匪犯境禄』（詳細不明）を元に作成された。アヘン戦争での清の敗北を広く知らせ、日本に迫る外圧に対する認識を深めようとした。そのため「盛衰記・太平記」に倣い、つとめて平易かつ読本形式で民衆にも理解しやすい配慮がなされた。学問所の許可を受けぬまま出版したとの名目で発禁処分を受けたが、貸本屋による重版がなされるなど大きな反響を呼んだ（詳細は森睦彦「海外新話の刊行事情」、『長澤先生古稀記念 図書学論集』三省堂、一九七三年参照）。本稿では早稲田大学蔵（リ〇八－〇五四八八）のものを用いた。

(20) 「八老独年代記 巻之中」（『闇之夜汁 全』福島県歴史資料館蔵菅野隆雄家文書七）。

(21) 「夢之浮言」（『真造辨 八郎信演』）。原本は不明だが、福島県伊達市にて個人蔵の写しが存在することが確認されている。伊達市保原歴史文化資料館にてコピーが所蔵されており、これを使用した。同館の五十嵐洋子氏に厚く御礼申し上げる。

(22) 「真造辨 八郎信演」（『真造辨 八郎信演』）。注(21)に同じ。

(23) 西周はJ・S・ミルの『功利主義論』を翻訳した際に『利学』（一八七七〈明治一〇〉年）という邦題を用いている。この用語が当時、どれほど普及していたかは定かでないが、ここでの「利学」とは西同様に「功利主義」の意味で用いていると考えられる。

付記 本研究はJSPS科研費 18J10502 による研究成果の一部である。

（一橋大学大学院）